親として和歌山に住む外国人生活者の経験
―「共に地域社会に暮らす人」として理解するために―

Experience of foreigners living in Wakayama as a parent
—To understand as people living together in the community—

嶋本 圭子[1]
[1]和歌山大学日本学教育研究センター

「親[1]として和歌山[2]で生活するとはどのような経験か」というリサーチクエスチョンをもとに，親として和歌山市で生活している外国人生活者（以下，生活者[3]）に，インタビュー調査を行った。分析から6つのカテゴリーを抽出し，本稿では3つのカテゴリーについての記述を載せた。方言が人間関係の構築に左右すること，学校との関わりでは，文化や言葉の壁で，何重にもわからないことがあることが，知見として得られた。

キーワード：親，和歌山，外国人生活者，現象学的方法，経験

1．はじめに

日本に住む在留外国人は，増加の一途をたどり，出入国在留管理庁[4]によると，2019年度には293万3,137人と過去最高になった。コロナ禍により2020年度は在留外国人数288万5,904人とやや減少したが，それでも，日本の人口の約2%が外国籍の人々である。

外国人が急増した背景には，日本政府が国際化や少子高齢化に伴い，外国人の受け入れを段階的に拡大したことがある。2008年の「留学生30万人計画」(2019年達成)，1993年に制度化された在留資格「技能実習」による実習生の受け入れ，2019年からの「特定技能」による労働者の受け入れなど，政府は外国人人材の獲得に力を入れてきた。

在留資格別にみると，永住者，技能実習，特別永住者，技術・人文知識・国際業務，留学が上位5位を占める。中長期的に生活基盤をおいている生活者が増加していることから，政府は，外国人との共生社会実現のために，様々な施策を行っている。

和歌山県のデータ[5]を見ると，令和2年10月1日現在の和歌山県の人口は，92万2,584人であり，在留外国人数[6]は，令和2年12月末現在で7,272人と，過去最高となった。在留資格別では，永住者，特別永住者，技能実習，日本人の配偶者，技術・人文知識・国際業務が上位5位である。

全国と比べると，和歌山県の人口に対して在留外国人の割合は，約0.8%と少ない。つまり，外国人の散在地域である。だが，和歌山県では人口の減少[7]が続いており，労働力を確保するために今後も外国人の受け入れを積極的に進めるものと見られる。全国と同様に，中長期的に生活基盤を和歌山県におく生活者が，今後も増加していくと考えられる。

県庁所在地であり，大都市の周辺に位置する和歌山市[8]も，人口が減少する一方で，外国人の割合が増えている[9]。令和2年12月の調査の時点で，人口35万6,523人に対して，在留外国人数は3,745人[10]，その割合は約1.1%である。和歌山県に住む半数以上の在留外国人が，和歌山市に集中しているものの，やはり和歌山市も外国人の散在地域であり，集住地域のように，外国人のコミュニティが形成されている地域であるとはいえない。

筆者は和歌山市に在住しているが，筆者の息子が通っていた幼稚園や，現在の学校には外国人の親が少なからずいる。彼らが幼稚園や学校と関わる際に，言葉の壁で困る姿を日常的に見てきた。そのたびに，筆者が普段，日本語教師として留学生に教えている日本語と，彼らが生活者として必要としている日本語とは，乖離しているということを実感してきた。この経験から，彼らが，親として和歌山で生活することはどのような経験かを理解したいと考え，本研究を行った。

2．外国人の親に関わる調査や先行研究

出入国在留管理庁は，18歳以上の中長期在留者および「特別永住者」，直近の上陸許可年月日から1年以上経過した人1万人（無作為抽出）を対象に，Webでのアンケート調査を8言語で実施し，1,600件の有効回答数を得ている（『令和2年度在留外国人に対する基礎

調査報告書』[11])。その調査項目の中に，「子育て・教育」があり，保育園・幼稚園・認定こども園等に子どもを預けるときに困ったこと，また，子どもが通っている学校において，親として困っていることに対する質問項目と回答がある。その上位3位を見てみると，保育園・幼稚園・認定こども園等に子どもを預けるときに困ったことは，複数回答（n=159）で，順に「特に困っていない」57.2%，「保育所・幼稚園・認定こども園等で子どもが仲間外れになったり，いじめられたりしないか心配している」21.4%，「保育所・幼稚園・認定こども園等の親同士の付き合いが難しい」20.1%となっている。また，子どもが通っている学校において，親として困っていることは，複数回答（n＝308）で，「特に困っていない」43.2%，「PTAの仕組みがわからない」19.5%，「親同士の付き合いに馴染めていない」17.5%である。どちらも「特に困っていない」という回答が多いが，これは配偶者の国籍が日本である場合は，その割合が高いためであると分析されている。また，「親同士の付き合いが難しい」ことも共通している。

「外国人の親」に着目した論考は，社会学，心理学，看護学などの研究者によって書かれたものが多い。羅・佐藤（2020：59）は，在日外国人への育児に関する研究の動向を明らかにし，在日外国人への育児に関わる看護研究の課題を検討するために，1990年から2018年までの文献検索による調査を行っている。その結果から，「在日外国人の文化背景を考慮して育児ストレス，在日外国人に求められる支援および実際に提供できる支援を検討することが必要である」と述べている。このような論考は，やはり看護学的見地から，在日外国人の子育てに関する困難，育児ストレス，そのケアやサポートを扱ったもの，乳幼児などの子育て段階を対象にしたものが多いことが特徴である。

日本語教育では，外国人生活者の研究において，親としての一面が取り入れられている論考に，新矢・柳田（2016）がある。国際結婚による移住女性の主体性や戦略に着目しつつ，移住女性のリテラシーの状況を明らかにし，それらと社会参加のありようとの具体的な関係について，事例に基づいて検討している。その分析結果から，子どもが持ち帰る学校の書類を読んだり書いたりできない母親の事例を挙げた上で，「ふだんの生活において，リテラシーが問題となるのは，子どもに関わることである」（新矢・柳田2016：46）と述べている。新矢・柳田（前掲）が指摘するように，筆者も外国人生活者が親として幼稚園や学校と関わる際に，「水曜日はお弁当です」というお知らせが読めずに，子どもに弁当を持たせられなかったフィリピン人の母親や，日常会話はできるが，役員があたり，保護者への連絡をラインで回す文面に悩む中国人の母親などを目の当たりにしてきた。

和歌山県に在住する「親」としての外国人生活者に関する論考はないが，「子」に着目した長友（2020）の論考がある。長友（2020：75）は，和歌山大学で2020年に立ち上げた「外国につながる子どもへの教育支援プロジェクト」の目的と支援の内容について述べた上で，「日本語支援と母語の重要性について」(2020：83）論じている。「子」に関わることは，「親」に直結する。そういう意味では，本研究と深く関わりがある論考である。

3. 研究概要

3.1　研究目的

2.で取り上げた出入国在留管理庁が行ったようなアンケート調査では，質問項目が決められているため，それに沿った回答が多く得られ，全体の傾向がどのようなものであるかを知ることもできる。だが，「(困っている）こと」を知ることができても，親としてどのように困り，受け止め，対処していくのかといった，その「人」は見えてこない。彼らは第二言語を使って，親として生活していく「人」であり，「人」を理解するためには，彼らを取り巻く様々な文脈とともに，その経験を理解する必要がある。そこで，「親として和歌山で生活するとはどのような経験か」というリサーチクエスチョンを立て，彼らの経験の意味を知ることで，彼らの生活世界を理解することを目的とした。

3.2　研究方法

本研究では，質的研究方法の一つである現象学的方法を援用する。

現象学の「現象とは，「意識に現れるがままの経験」を指す」(松葉2014：8)。現代哲学の大きな流れを形成した現象学は，フッサールによって提唱され，ハイデガーやサルトル，メルロ＝ポンティなどに受け継がれた。現象学は，フッサールの言葉にある「「事象そのものへ」をテーゼとして，私たちの経験がいかに成り立っているのかを記述的に探究する哲学であり，方法である」(西村2018：57)。このような現象学の認識論に立って，現象学的研究は，「社会学，精神医学，心理学，様々な学問分野に導入され」(松葉2014：5)，大きな影響を与えた。

Cohen（2005：3）は，現象学的な研究の方法について，「この方法は，ある1つの経験を，その経験をし

ている人が理解しているとおりに理解することを研究課題としているときに，最も有用である」と述べている。つまり，出来事を経験した人にとっての意味という点からとらえる。また，フッサールの主要な考え方には，「現象学的還元」があり，それは「括弧入れ」とも呼ばれている。これは，「経験を語っている人自身にとっての意味をありのままに理解するために，偏見や個人的な思い入れを括弧でくくること」(Cohen2005：10）であり，研究者はそれまで身につけたすべての先入観の判断停止をすることを求められる。

分析や記述に関しても，クヴァール（2016：31）は「生活世界に焦点をしぼり，対象者の経験に対して開かれた態度で意識を記述し，分析する。特に重要なのは正確な記述」であると述べている。

筆者は普段，日本語教師として，外国人と関わる機会が多い。その先入観や前提などをいったん棚上げし（括弧でくくり），親である生活者の視点にたって，その経験を理解するために，この現象学的方法を援用することが最も適していると判断した。

3.3　調査協力者

和歌山市に住む外国人生活者であり，親として子育てをしている中国人女性のれいさん（本人の希望による仮名）に，調査協力を依頼し，インタビュー調査を行った。れいさんと筆者の息子は友達であり，れいさんと筆者も，学校行事などで顔を合わすと声をかけ合う関係であるので，ある程度のラポールは形成されている。なお，以下に出す情報は，すべてれいさんに確認し，承諾を得ている。概要を以下の表1に示す。

表1　調査協力者の概要

調査協力者：れいさん

- 30代の中国人女性
- 中国吉林省出身
- 2002年に来日
- 和歌山市に住んでトータルで8年
- 現在はシングルマザーで中3の娘と小2の息子と同居
- 働きながら2人の子育てをしている

3.4　調査方法

インタビューを行い，得られたデータは現象学的方法の分析手順（後述）を用いて分析を進める。

現象学的インタビューにおいては，Moustakas（1994）は形式化されていないもの，相互的な過程を巻き込んだ自由形式のコメントや質問が役に立つと述べており，「語り」のデータを引き出すために比較的構造化されていない，会話に似たインタビューを目指す。

松葉（2014）は，「現象学的研究の場合は，研究協力者に自由に語ってもらうことが重要」（2014：1）で，「その語り手の状況や関心にそった言葉を投げかける必要があり，それはそのときの状況によって決まる」（2014：3）と述べている。

また，クヴァール（2016：131）は，質的なインタビューについて，「調査インタビューは柔軟性をもち，文脈によって変化し，インタビュアーとインタビュイーの個人的な相互関係に依存する」と述べている。

Moustakas（1994），松葉（2016），クヴァール（2016）が述べるような現象学的インタビューを行うため，半構造化インタビューを行った。

「半構造化インタビューとは一定の質問に従い，面接を進めながら，被面接者の状況や回答に応じて面接者が何らかの反応を示したり，質問の順序，内容を臨機応変に変えることのできる面接法である。構造と若干の自由度をあわせもつことで，ある方向を保ちつつ，被面接者の語りに沿って情報を得ることが可能になる」（保坂・中澤・大野木　2000：53）。

本研究では，れいさんに，できるだけ自由に経験を語ってもらえるように，しかし，れいさんが，母語ではない日本語で語ってくれるということを考慮したため，ある程度質問項目を設定して行うほうが話しやすいだろうと判断し，このインタビュー方法をとることにした。またインタビュー時にはフィールドノートもつけた。

3.5　倫理的配慮

質的なインタビューは，調査協力者（以下，協力者）にとって決して負担が軽いものではないと筆者は考えている。桜井（2002）は，次の倫理的原則を列挙している。

①調査目的を伝える
②語り手を優先的に配慮する
③語り手のプライバシーの保護
④語り手の権利の保護

れいさんにインタビューをお願いするとき，この4つの原則を念頭においた。筆者個人の研究のためであること，もし質問で答えたくないことがあれば，拒否してもいいこと，録音させてもらいたいこと，必ず匿名にし，自分の研究以外の目的のためには使わないことなどを伝え，その上でれいさんの承諾をもらった。以下の表2に質問の大枠を示す。

表2　質問の大枠

- 日本に来た経緯
- 和歌山に来た経緯
- 日本語学習について
- 和歌山での生活について
- 方言について
- 仕事について
- 日本での友人について
- 子育てについて

3.6　データ収集

インタビューはICレコーダーで録音し，トランススクリプトを作成した。以下の表3にデータ収集の流れを示す。

表3　データ収集の流れ

- インタビュー回数：2回　60分×2
  1回目：2022年2月25日
  2回目：2022年3月16日
- その他の電話でのやりとり（れいさんの許可をとったもの）
- インタビューの際のフィールドノート

4. 分析

4.1　分析過程

現象学的な研究において，松葉・西村（2014）はコード化やラベリングのような具体的手順がなく，マニュアル化できないので，どのような方法が適しているかは研究を始めてみないとわからないと述べている。また高橋（1990：21）も「現象学的アプローチは，どこまでも対象者の生きられた経験を理解しようとするため，その現象にあった適切な研究方法をその都度展開していかなければならない」と述べている。

だが，その方法論については，現象学的心理学者であるGiorgiやColaizziが方法を定式化している（松葉2014）。つまり，分析の手順を示しているのであるが，例えばColaizzi（1978）は，7段階の分析方法を提示している。一方で，「Colaizziは研究者に，これらの手順にあまりこだわらないように勧めている」（ホロウェイ＆ウィーラー2001：131）

筆者は，Colaizzi（1978），の分析手順を参考にしながら，自身のデータに合わせた7段階の分析を試みた。表4にその手順を示す。

表4　分析手順

（1）対象者の記述の精読

インタビューデータに対する印象を得るために，繰り返し徹底的に読む。

（2）重要な陳述の抽出

インタビューデータから，探求しようとする現象に関する段落，文章を抜き出す。

（3）意味の形成

重要な陳述の意味を詳細に明らかにする。（2）で抽出した段落，文章の中に潜む不確かで不明瞭な，しかも言語として十分表現されていないものと対峙する。

（4）形成した意味の組織化

（3）からテーマ・キーを抽出し，それらをグループに分類をし，カテゴリーごとに分ける。

（5）記述の開始

データ分析の結果から調査した現象を徹底的に記述する。

（6）記述の確認

2回目のインタビューまでに（5）で作成した研究結果としての記述を対象者に戻し，相違がないかどうか，つまり，協力者の経験や現象となっているかどうかを確認してもらう。

（7）記述の洗練

2回目のインタビュー時に，確認してもらった情報をもとに，記述の洗練を行う。

（2）～（3）の過程を，表5に例を示す。

インタビューデータから，重要な陳述→意味の形成→テーマ・キーの流れを経て，コアの部分を取り出していく。

表5　重要な陳述→意味の形成→テーマ・キー

発話番号※	重要な陳述	意味の形成	テーマ・キー
R7－8	高校を卒業後，2002年に留学で来日し，栃木の日本語学校から東京の専門学校へ進学し，卒業後，日本人と結婚した。千葉や東京に住んでいた。	2002年に留学で来日後，日本語学校と専門学校を卒業して日本人と結婚し，関東に住んでいた。	留学で来日，専門学校を卒業後，日本人と結婚し，関東に住んでいた。

※発話番号は，れいさん（R）がターンで話した順に番号を付けた。

これらのテーマ・キーから，グループ分類をはじめ，カテゴリーを抽出した。表6にその例を示す。

表6　カテゴリーの分類例

発話番号	テーマ・キー	カテゴリー
R3−6	●来日前に日本語を勉強し，簡単な会話をしたり，文章を書いたりすることができた。	和歌山に来るまで
R7−8	●留学で来日，専門学校を卒業後，日本人と結婚し，関東に住んでいた。	
R9−11	●元夫が和歌山出身だったので，和歌山に引っ越すことになった。	

表6の分類によって，以下の6つのカテゴリーが抽出された。

①和歌山に来るまで
②和歌山になじめない
③和歌山のよさがわかってきた
④「わからないこと」がわからない
⑤和歌山での同国人の友達
⑥中国にいる家族との情

この6つのカテゴリーをもとに，4.2で②，③，④の記述と分析を行う。

4.2　記述と分析

4.1の分析過程を経て作成されたれいさんの記述を以下の表7〜11に載せる。記述は最初の記述を作成後，本人に戻し，確認してもらった上での最終的な記述である。本稿では，「②和歌山になじめない」，「③和歌山のよさがわかってきた」，④「「わからないこと」がわからない」から，分析を行う。なお，記述では，れいさんの経験を正確にとらえるために，れいさんが語ってくれた言葉をできる限り使用している。また（　）の部分は，データの読みやすさのために，筆者が言葉を補った部分である。表7に②の〈1〉を示す。

表7　記述1）②和歌山になじめない〈1〉

(R9−16)
元夫が和歌山出身だったので，和歌山に引っ越すことになった。引っ越す前に，下見に1回来たことがあって，和歌山の人の話す言葉が全くわからず，「何をしゃべっているのか？」と思った。イントネーションも違うし，語尾が上がったり下がったり結構激しいし，全く耳に入ってこなかった。そのとき，私は自分で日本語が下手だとは思わないぐらいに，普通に日常会話はしゃべれたが，和歌山に行ったときに，一言もわからなかったことが，すごく嫌だった。それで「和歌山に引っ越すのは嫌だ，嫌だ」と言っていたが，仕方なく引っ越して来た。
和歌山に来てから，最初の1，2年間は和歌山の人が話すのをまったく聞き取れなくて，「何をしゃべっているのか？」と思っていた。話しているときに，ひたすら相手の顔を見て，「あ，(言っていることは)こういうことなんですね。」と相手がしゃべっていることをもう一度頭の中で理解して，「そうそうそう」というふうに自分に確認していた。会話が成り立っているかどうかもわからなかったが，そういうふうにやっていた。
関西は語尾の話し方が違う。和歌山では，「なんで？」という（「で」の音が高く，語尾が上がる）。「で」が強くて，「私，怒られているの？何か嫌なことしたかな」とずっと思っていた。すごく怒られている気分になっていた。でも，後から聞いたら，それは怒っているのではなくて，方言の一部だということがわかった。

和歌山に来る前，日本語を使って普通に会話ができていた彼女が，方言によって，同じ日本語であるはずの日本語が，まったく聞き取れなくなってしまったことに対する「とまどい」が伝わる。それでも和歌山に来てから，何とか会話を成り立たせようと，相手と話しながら，頭の中で必死に言っていることを整理していたという，その奮闘ぶりも伝わる。さらに，方言は，れいさんの中で「人間関係に対する誤解」を生んだ。れいさんは，和歌山の人が言う「なんで？」は，「で」の語尾があがり，それが強く聞こえるので，ずっと怒られているように感じていた。

方言がれいさんの人間関係に大きな影響を及ぼしたことは，次の表8の②の〈2〉の記述からもわかる。

表8　記述2）②和歌山になじめない〈2〉

(R24−38)
和歌山に来たときは，娘がちょうど4歳で，幼稚園に入る年頃だった。近くの幼稚園に通うことになったが，子どもも方言が聞き取れなくて，最初はなかなかなじめなかった。私もなじめなかった。方言がわからないことで，幼稚園のママ友達と交流ができなかった。向こう（相手）はすごく熱心に言ってくれるが，こっちの反応が薄いから，向こうもちょっと「うん？」ってなるかもしれなくて，こっちから「すみません，もう和歌山方言がわからないんで」

って言っていた。そしたら，向こうもすごくゆっくり丁寧にしゃべってくれた。でも，和歌山のお母さん同士がしゃべっているのを見ても，全く輪に入れなかった。私と個人でしゃべっているときは，すごく丁寧に言ってくれるから理解できるが，和歌山のお母さん同士がしゃべっているときに，「楽しそうだな」と思って近づいて耳を傾けても，何も聞き取れない。一緒に話せないとかなるから，やっぱり友達になりにくかった。仕事場でも，「ごめんなさい，私，関西弁わからないんです」って言ったら，向こうもゆっくりしゃべってくれるが，（仕事場の）友達同士しゃべっているときに，輪に入れなかった。やっぱり，まず文化の違うところに，（さらに）方言が違うからだと思った。

方言によって，「人間関係の構築」がうまくいかなかったことが読み取れる。方言がわからないから，「幼稚園になじめない」，さらに，「ママ友の輪に入れない」，そして仕事場でも「友達の輪に入れない」と彼女自身が「ソト」にいることを強く感じていた。

だが，方言ができないことによって，彼女が不当に扱われていたわけではない。「ママ友」も仕事仲間も，個人的に話すときは，「方言がわからない」と言えば，ゆっくり丁寧にしゃべってくれたと述べている。それでも，方言の壁によって，「輪に入れない」ことで，彼女が孤立感を感じていたことが伝わる。

だが，和歌山にだんだん慣れてくるにつれて，心境が変わる。以下の表9にその心境の変化を記す。

表9　記述3）③和歌山のよさがわかってきた

（R44−48）
最初は（和歌山の人と）友達になれなかったから，すごく寂しかったが，だんだん方言もわかるようになって，この地方の人柄とかもわかるようになってからは少しずつ友達も増えた。仕事場でも最初はしゃべれなかったが，今はしゃべるようになって，だんだん楽しくなってきた。

若い時から東京に住んでいて，和歌山の，のんびりしたリズムが最初ちょっと合わなかった。向こうはせかせかするけど，和歌山はゆっくりで，急かす人がいないから，だんだん住み心地がよくなってきた。

子どもも学校になじんできて，やっぱりゆっくりのんびり子育てできるのが，すごくいいと思うようになった。

方言がわかるようになってからは，彼女に「楽しくなってきた」という心境の変化が訪れた。これは人間関係がうまく構築できたことを意味する。また，最初は，関東に住んでいた時の生活のリズムに慣れていたため，和歌山ののんびりしたリズムが合わなかったが，そのリズムに慣れてくると，そのゆっくり，のんびりしていることが，子育てにはいいと思うようになった。人間関係の構築とともに，和歌山になじみ，そのよさも見つけられるようになってきたのである。

続いて「④「わからないこと」がわからない」の分析に移る。表10にその記述〈1〉を示す。

表10　記述4）④「「わからないこと」がわからない」〈1〉

（R57−71）
学校のPTAとか，抽選があるときも，ないときもあるが，6年間通っていたら，1回ぐらいは必ず役が回ってくる。役が与えられるのはいいが，教えてくれないのは困る。私の国にはPTAがないから，保護者の組織だとはわかるが，知らないことが多すぎて，どこをどう質問すればいいかもわからない。日本人のお母さんは，経験からPTAが何であるかを知っているが，外国人にはわからない。私は自分がわからないから，ひたすら学校の先生に電話して聞いて教えてもらっていた。和歌山だけではないが，日本では，みんな自分からは教えてくれない。聞いたらすごく丁寧に教えてくれるので，それは助かる。でも聞かなかったら，ほったらかしになるから，私みたいに外国人のお母さんは，聞くことが大事だと思う。保護者から「こういう事するんだよ」と説明してくれたらうれしい。私の場合は，幸い，周りのお母さんがすごく丁寧に教えてくれた。ぼーっとして質問すらわからない時には，「これ，こうするんだよ」と引っ張ってくれたからできたこともある。

でも，言葉がわからないお母さんはたぶん教えてくれても理解できないから，PTAの役割を与えず，できる人に任せないと，学校や子どもたちに迷惑がかかる。そこは，できる人に任せたほうがいいのではないかと思う。もし日本のPTAをどうしても経験したい（外国人の）お母さんがいれば，一緒にやるのが大事だと思う。

このPTAの話は，自国にない文化は，たとえ日本語ができても，「わからない」ということである。そもそも「PTAとは何か」がわからないから，「質問は？」と聞かれても，何を質問するのかさえ，わからないの

だと言う。だからこそ，外国人の保護者に日本人と同じように役を振り分けるなら，ただ振り分けるだけではなく，外国人であることを理解した上で手助けし，振り分ける必要があると考えている。

また，彼女自身は，「わからない」ことに対して，「ひたすら先生に電話して聞いて教えてもらっていた」とあるように，「自分から聞くこと」を大事にしている。日本人側からの理解と，外国人側からの「わからないことは聞く」という行動，お互いの歩み寄りによって，外国人の親がPTA活動に参加できることを述べている。

だが，それは，ある程度日本語がわかる親を前提にした話である。日本語がわからない親は，「言葉がわからない上に，PTAが何であるかもわからない」ので，役を振り分けないという配慮が必要であると考えている。役を振り分けないほうがいいという理由は，次の表11の記述からもわかる。

表11　記述5）④「「わからないこと」がわからない」〈2〉

（R73－82） 地区の委員会も抽選があるが，そこもちょっと困る。（夏休みの）ラジオ体操の役と言われても，「ラジオ体操があるんですね」としかわからない。その裏で仕事をしている委員会の人たちは，結構大変だと思うが，外国人のお母さんやお父さんに「役割をして」と言ってもたぶんなじまない。完全にわからないお母さん，言葉もわからないお母さんの話も聞いたことがある。どこでどう始まるのかもわからない。いつどうすればいいのかもわからない。言葉をしゃべっていても理解されないとか，まず本当に言葉を覚えていないお母さんもいるから，そういう人は本当に大変だと思う。 ひたすら（プリントの）文字を読むのに苦労する人もいる。日本語を勉強しているお母さんもいれば，していないお母さんもいるので，日本語を勉強していないお母さんの視点から考えると，こういうときに子育ては大変だと思う。

「言葉をしゃべっていても理解されない」，「ひたすら文字を読むのに苦労する人もいる」と，彼女は同じ外国人の親の視点から，その子育ての大変さを述べている。言葉だけでなく，日本の学校の文化も，それに関する役割もわからないという何重もの「わからない」に陥っている親もいることを，日本人側が知る必要があると彼女は述べているのである。

5. 考察

本稿では，「親として和歌山で生活するとはどのような経験か」というリサーチクエスチョンをたて，れいさんの経験を分析してきた。本節では，以下のようなキーワードとともに，考察する。

5.1 【方言は人間関係の構築に左右する】

外国人が，親として生活するということは，地域に密着して生活するということである。れいさんは，日本語の日常会話ができるという自負のもと，和歌山に来て，同じ日本語であるはずの和歌山の方言が，全く聞き取れなかったという経験をした。そして，その「話し方」によって，「怒られている」と誤解し，さらに「ママ友」や「仕事仲間」の輪に入れないという孤独感を感じていた。だが，方言がわかるようになるにつれて，友達が少しずつ増え，楽しくなり，またゆっくりのんびり子育てできる和歌山の良さに気づいた。彼女は，和歌山という地域社会に自分の居場所を見つけたのである。

地域に密着して生活するということは，方言と密着して生活するということであり，それは，その地域での人々との関係性や住みやすさに大きく影響するということがわかった。

5.2【「わからないこと」がわからない】

外国人が，親として学校の文化やきまりに関わる際には，何重もの「わからない」が存在する。れいさんは，PTA活動でわからないとき，「ひたすら学校の先生に電話して聞いて教えてもらっていた」ことを話している。日本語ができても，自国にない「PTA」が何であるかが理解できないので，何をするかもイメージできなかったと彼女は言う。つまり，「PTA」が何であるかがわからないから，どうするかもわからないという二重の「わからない」に陥っていたということだ。れいさんは，この「わからない」に，「聞くことが大事」という信念のもとに対処してきた。つまり，「ひたすら聞くこと」によって，学校のコミュニティに参加してきたのである。

だが，それは彼女が，日本語での日常会話ができたからという前提がある。彼女は，日本語ができない親は，日本語も，文化も，役割で何をするのかもわからないという何重もの「わからない」があるので，PTAなどの役を振り分けないほうがいい，振り分けるなら一緒にやるべきだと，日本人側の配慮が必要であると述べている。

外国人の親が，学校と関わる際には，言葉や文化，そ

れに伴う役割などの壁で，何重にもわからないことがあること，またそれを日本人が理解し，配慮や手助けをする必要があるということがわかった。

6. まとめと今後の課題

親として和歌山で生活するということは，地域に密着して生活することを意味するがゆえに，方言が人間関係の構築に左右すること，学校と関わる際には，文化や言葉の壁で，何重にもわからないことがあることが，本稿で得られた二つの知見である。

「方言が人間関係の構築に左右する」ということは，地域に密着して親として生きていく生活者にとって，「教育機関で学ぶ正しい日本語と，地域社会で必要とされる日本語は，必ずしもイコールではない」ということを意味する。教育機関で学ぶ日本語との乖離を視野に入れながら，和歌山という地域で，親としての市民生活を保障する日本語とはどういうものかということを考えていく必要がある。

また，「「わからないこと」がわからない」ことには四つの重要な示唆がある。一つ目は，日本語ができても，自国の学校文化にないものは，「わからない」ので，その役割もわからないこと，二つ目は，日本語がわからない親にとっては，日本語，文化，役割など，何重もの「わからない」が存在することである。三つ目は，外国人の親が，「わからないこと」に対して，積極的に「聞くことが大事」であること，四つ目は，日本人側からも，外国人の親が違う文化や母語を持ちながら，第二言語を使って生活している人であることを理解した上で，その「わからない」を理解し，手助けや配慮をすることである。このようなことに対して，親同士がお互いに「歩み寄り」ができれば，外国人の親が，学校のコミュニティに参加していけるようになり，お互いに居心地のいいコミュニティが作っていけるのではないかと筆者は考える。

現象学には，「本質観取」の思考法があり，質的研究において，「本質観取に必要なのは，研究者の主観において感じたこと，直観された意味であり，それを思考の底板に据えるのが現象学的思考の特質である」と山竹（2020：278）は述べている。だが，その「本質とは多くの人が共通了解できる意味」（山竹2020：284）である。

外国人生活者が，もはや「隣人」となった日本社会において，れいさんのような経験は，「個」の経験でありながら，多くの人に「共通了解」を得られるものであると筆者は考える。また，本稿は，和歌山市で行った調査ではあるが，和歌山市と同じように，都市近郊で，人口が減少する中で外国人が増えつつも，外国人の散在地域であるという地域は，他県にもあるはずで，そのような面からも「共通了解」は得られると考えている。

青木（2001）は「日本語教育に携わる者は，日本に住む外国人の人たちが，人間的な生活をしていけるように，どのような支援ができるのかを考える義務があり」，「その支援は，日本社会への適応という枠組みでとらえるべきではなく，異文化接触の原則である「お互いの歩み寄りを前提とすべき」（2001：185）であると述べている。

八木・中山（2021：32）は，質的研究において，研究者自身が，「見ている自分，聞いている自分，理解している自分が「何者か」ということを省察する必要がある」と指摘している。

また，八木（2016：123）は，研究「成果を研究に協力してくれた人の世界に還元し，何らかの方法で彼らが生きることに結びつけることができないかと模索してきた」と述べ，「「他者を書く」者の責任」（八木2008：158）について自らを振り返り，言及している。

筆者は，れいさんの経験を聞き，書きながら，「他者の経験を書く自分はいったい何者なのか」と自問し，その責任の重さを感じていた。だからこそ，本研究の成果を，「誰もが納得しうる普遍的な共通了解」（西2020：74）につなげていかなければならないと考えている。

まずは，筆者が担当している日本語教師の教師教育の授業で，本研究の成果を共有していく。そうすることで，現在の外国人との共生社会における異文化理解を促し，次の人材育成に，微力ながらも貢献できるだろう。

さらに，和歌山大学の「防災ハンドブック」[12]（長友前掲：83）のような取り組みも参考にしながら，青木（前掲）の知見にもとづいて，本研究が，れいさんの生活世界にどう還元していけるのか，どのような情報提供をすれば，和歌山で生活している外国人の親が，不利益を被らずに生活していけるのかを今後の課題とし，研究を前に進めていきたい。

謝辞

本研究の調査にあたり，インタビューに協力してくださったれいさんには，心から感謝申し上げます。

注

[1] 本稿での「親」は，未成年を養育する立場にある父親，母親を指す。

[2] 本稿での「和歌山」は，和歌山県，和歌山市など特に

区別せず，地域として記している。

[3] 本稿での「生活者」は，留学生や児童，短期滞在者ではなく，就労，結婚等で来日し，生活基盤を日本においており，日本語を第一言語としない外国籍の人を指す。

[4]「令和2年末現在における在留外国人人数について」出入国在留管理庁 https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00014.htm(2022年3月25日アクセス)

[5]「和歌山県の人口」和歌山県 https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/020300/kids/wakadata/jinko.html(2022年3月25日アクセス)

[6]「和歌山県における在留外国人数の状況」和歌山県 https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/022300/d00152731_d/fil/zairyuugaikokujin.pdf (2022年3月25日アクセス)

[7] [5] と同じデータより

[8]「令和2年度国勢調査基準人口世帯数（2020年12月1日現在）和歌山市 http://www.city.wakayama.wakayama.jp/shisei/wakayama/1001006/1001007/1000509/1042478/1032551.html（2022年3月25日アクセス）

[9] 第2期和歌山市人口ビジョン』2020）和歌山市 http://www.city.wakayama.wakayama.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/002/797/2vision.pdf（2022年3月25日アクセス）

[10]「市区町村別　国籍・地域別　在留外国人」(2020年12月現在）在留外国人統計　出入国在留管理庁 https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20200&month=24101212&tclass1=000001060399 (2022年3月25日アクセス)

[11]『令和2年度在留外国人に対する基礎調査報告書』出入国管理庁 https://www.moj.go.jp/isa/content/001341984.pdf（2022年3月25日アクセス）

[12] 1)「こどものためのやさしい日本語防災ハンドブック」(2021）和歌山大学　外国につながる子どもへの支援プロジェクト

2)「留学生と日本人学生のやさしい日本語防災ハンドブック」(2021）和歌山大学　外国につながる子どもへの支援プロジェクト

引用・参考文献

青木直子（2001)「第Ⅲ部第1章　教師の役割　3学習を支援するための教師の役割」青木直子・尾崎明人・土岐哲（2001)『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社，182-197.

桜井厚（2002)『インタビューの社会学』せりか書房

新矢麻紀子・柳田洋平（2016)「日本語教室不在地域における国際結婚移住女性のリテラシー補償と社会参加―生活史と学習環境に着目して―」『大阪産業大学論集，人文・社会科学編』26号，37-52

スタイナー・クヴァール　能智正博・塩浦暲［訳］(2016)『SAGE質的研究キット2　質的研究のための「インター・ビュー」新曜社

高橋照子（1990)「看護における現象学的アプローチの活用」『看護研究』23/5，19-24

竹田青嗣・西研（2020)『現象学とは何か　哲学と学問を刷新する』河出書房新社

長友文子（2020)「外国につながる子どもたちへの教育支援」『Kii-Plus Journal』和歌山大学　外国につながる子どもへの支援プロジェクト，75-84

西研（2020)「【総論②】本質観取をどのように行うか―現象学の方法と哲学的人間論」竹田青嗣・西研（2020)『現象学とは何か　哲学と学問を刷新する』河出書房新社，61-120

西村ユミ（2018)「看護ケアと現象学的研究」『日本糖尿病教育・看護学会誌』Vol.22，57-60

保坂亨・中澤潤・大野木裕明（2000)『心理学マニュアル面接法』北大路書房

ホロウェイ+ウィーラー　野口美和子［監訳］(2001)『ナースのための質的研究入門―研究方法から論文の作成まで』医学書院

松葉洋一・西村ユミ［編］(2014)『現象学的看護研究　理論と分析の実際』医学書院

Marlene Zichi Cohen・David L.Kahn・Richard H. Steeves大久保功子［訳］(2005)『看護における質的研究2　解釈学的現象学による看護研究―インタビュー事例を用いた実践ガイド』日本看護協会出版会

八木真奈美（2008)「定住外国人とその社会的文脈の関係から導き出す「見えない生活者」の再構築―リフレクシブ・エスノグラフィーという手法を用いて」大阪大学大学院文学研究科博士学位論文

八木真奈美（2016)「個人の経験を社会・変革・未来へつなげる実践を目指して」2016年度日本語教育学会春季大会（目白大学2016.5.22）研究発表【予稿集】，p123-127

八木真奈美・中山亜希子・中井好男（2021）［編］『質的言語教育研究を考えよう　リフレクシブに他者と自己を理解するために』ひつじ書房

山竹伸二（2020）「【心理学と現象学】本質論からみた人間心理」竹田青嗣・西研（2020）『現象学とは何か　哲学と学問を刷新する』河出書房新社，253–284
羅云潔・佐藤洋子（2020）「在日外国人の育児に関する文献検討」『日本小児看護学会誌』Vol.29，59–64
Colaizzi P. (1978) Psychological research as a phenomenologist views it.In Existential phenomenological alternatives for psycology (eds R.Valle & M.King), pp48–71, New York :Oxford University Press.
Moustakas,C.E (1994) Phenomenological research methods.Thousand Oaks,CA:Sage